へ 5
4513

門へ5
號4513
巻

昭和十一年
一月二十三日
購求

勿塞

五老井記

許六選

觀水文庫

霊泉あまれりとゆゑよりあまたして三尺ばかりの池より流れ出るを潺湲と名づけ五老井と名つく別墅ばかりにあて五老菴を作る主人姓は木名は許六号は五老井居士と潛すあるとき予が別号也驛の原不知川流れて多羅の山南よりしり十旬の休暇を

うゝひ半月許深く領をる亀遥よりきく来
れども此の霊鍋を坂西より流し一めぐりあれ打ふ
重泉を去る波てはる隆の白れを岸の中よ
ゝめ心となすゝ其れ乃ちきるゆえ恵
山乃泉脈を通し一あまねくこれ肅列の金氣
よひゝ立つへるまそれ教白教の業ゆけて
まりいな日河の生涯を安ふかきふへうゝよ
一ゝもの冥よりあて命を教ふるゆえ基を
と寸霍山鳴ら井盤ゆ細流ゑ上人の抑の

法も今は世よ伝流ゑゝ法其要廣大よ
て神仏の冥をすゝしめ見ッ竟の井掘り禹ゆ
世ちと夷ゝ毛てよゆ民れ打ゝやゝなゝ
ゝ也後よ山あるゝ栗の器と以ゝ時よ
みゝよゝ山して眺ゝきハまわゝ一衆の
為ゝ仁南仁小ゆ山の寺ゝすまれ日枝伊吹
皆比良三上ゆ為ゆ眸をゝく申酉の方よ
衡ゝ器あり聚民たゝゆ市ゆゝ大上ゝ
ゝ所ゝゝゝれ杖を曳て八幡を廻ゝ器予

蹇を薇(ワラビ)を薤(ラッキョウ)をとり栗(クリ)を拾ひ若粥(メイシュク)を炊く柳陰を路に遮て牧を設て勝を賽(スボ)め賞を六人一度に分(ワク)る茶碗五ツ筆墨の外に物なし一日に杜宇(ホトトギス)を聞駅路の程千里に及ぶを合て煙をかすめ世を遁る筆にあてて寸樹に鉏(クサビ)を入て窓の外に自(ウ)ゑたるものゝ如く畑を穿て八拍の凡種を蒔て色に出る花をといへるも山蜥の為にせるを為ら嘆(ナゲ)く陶淵明文回(ブンカイ)

僻(ヘキ)せるを二十余年子騰(シヨウ)芝猶を師とし物を呆て人の貴龍を窺て雪裡の芭蕉を玄天に物自然に一味の風雅を愛むとす世上の名利を捨てすべて俗の心気のたのしみを尽すべし風雅ハ卿達乃ち為戯となるにまさる風雅の為文面を楽世りものをきうすべと芸年志代同じくてやく家をるすけまや孫の樹下に徘徊すれども文を答る物

なし甲陳の名は世間の輝牒のこと多く
書記に脱てこれを載しこれの流は脚
を洗て還る干岩元録五年壬申春三
月於盤樂樹下勝毫

文山

諏

元禄壬申冬
十月之日詩六亭具り

[illegible]
野を仕なしたる風雅乃あ〳〵士 詩六
仲実を奏む小粒の吃味して 洒堂
汁乃奏しは秋の風れ 紙水
岩の月奥へ入て 古 蕉 紙葉
[illegible]人工夫 [illegible]風 牧屋乃海雲 筆

方寸の侍従中より贈まれて
焼焦（タキコカ）しの小蕪もみ漬（ス）　菊
粽つむ菖の葉をよぶるまで　云
堰（テカイ）堰をのぼるなゝ乃入口　坐
はらはらと雫も色人もらす交る　葉
秋近のけて蜻の咽飽き　れ
青雲あるゝ神の交遷　菊
小はぎ萩乃ねそよぐつ　云
八月を旅面白き小眼鏡　き

焼山あしの雲形赤ちけ　葉
手紀す帝も色の木陰まて　乃
はしも雲子鶴乃卵（ガイ）孵　菊
まゝふく風雲の笛吹つゝや　云
南蛮の巫を酒よ解すれ　き
さはなまと鏡一おすまて　葉
夜長きと巫も持の上　れ
竹乃教ゝつゝ甲侍（チ）　菊
山ねとゝ雲ゝ山を出る夢　云

児達を鮎の手焼ゆるされて　蓬堂
瓦月よかよ舞台屋の世界　葉
ぬっぺり顔をもたつへきしす　爽
毘沙門をかくうえて出る船　葉
きりぎす毘金門堂の小方丈　六
たのまりしぬ　狐　やしき　堂
一すしもまきき葉のちき蓬原　葉
藤棚を下る蓬枕の坂　水
家長れしき寸白も年の伝　葉

蓬磨毎年なむ百姓の家　六
むのまま〳〵て迫る神示家　堂
七十乃変形為蓬堂立　葉

冊唫

艷船や比叡すそ小さく雪ふり　李由

蓮浦　納屋を宿をゆれけり　許六

酒屋をはなれて夢を覚て　汶郵

京のゆくすゑ横嶋を流する　徐寅

月ふき揚陽よ祝のぬれ迄り　六

一城ふる風　四年花屋　由

ウ

名をよ侯よの子稲を名よして　子

女房の供よ　吏乃いろうし　村

門口午化粧立ふ宿の有　由

印ふ午風　月花乃蓋　四　六

はふ籠の菜のちろ〳〵とある蓋　之

ぎんなん瓦のあまる　小盤　子

引キ飯乃美田ふ　男アル　六

庭で風ふ風なの出かる　由

大坂ふ末務のやすき妖の身て　寅

月夜よ俤る　奥の世の中　村
一あ〜一先　樹の花咲ぬ　六
池の面　若草　春の蛙　なる　由
若
永き日　十三　清よ　雲　村
熱〜〜　解て　れ　いハ　子
肌を　とび　の草　貸の　ふ　由
回〜〜　れの　はく　ち　六
城の　中　一　ん　寅
上の　かる　亀の　掬　明　之

掃ちきる　小庭　拓　作り　て
ふ　け　て　遠　海　雲　乃　丸　六
物　答　の　先　口　も　ま　ほ　き　て　由
屋　い　の　隙　を　ま　ふ　か　て　村
そ　よ　と　麻　な　れ　し　多　自　在　子
昭　平　枝　て　む　す　ま　猿　巣　猩　由
ツテ　豊　答　先　一　枝　拓　て　ま　拭　六
何　平　少　あ　く　作　海　乃　寅
能　は　ち　ま　格　の　帰　つ　れ　て　之　六

秋のまし子は秋をとぐ爲　由村

はるゝ間ゆ月を見る

苔も赤葉も所くゝる色　寅

弐吟

賀波

秋もなを厚おり掛よ声さ小

葉ゆ乃そ〻ゝかるる盆夢待　許六

蕾の月剃へ色れ寄外て　利牛

何ゝも枯れすゝまい臭さまる　坡

大蕾の中て精出す　五さ　八

ちやい七ッ乃徒花　穿鑿　牛

葬れよ傘をたづへ来てつけて　八
女房乃敵よ一ツ呑せ也　六
餅屋をよつきれ紙ぞあて盃き　牛
かい出をうるる書町の坂　坂
用心乃や孫の碾(ヲモニ)平重陳て　六
玉子の殻れ多き掃溜　牛
何ともなれ神きく出家なる　坂
日暮南人の戻るきれ　六
恠奇難をひろう四ま心　牛

踏殺さうと寺乃芝土よ　八
さんくと自然の出れ高る書　六
無姫追ぶす肌の宝ぶき　牛
名 秋さなハきるわ美屋もさぬきて　坂
家入前乃三井の振舞　六
一ツりの面よ涼き杖のを　坂
女子たうまがしまの出五原　六
煙掃の乃をで京の所ハる　八
をもり浜し風町の考会　六

雪消を傷と通つく奥よみを　坡
だんだんとして会杯集つく　六
旅人のもらひたうまは伊達をて　八
け雪祭日これうりめ　六
東稗の穂の久しぶりの代　坡
解乃競ひよ麻を巡せ　六
ウ
相原紙へれのふきかりれ　円
痺癖をうつるにの修験　坡
無備は見やうをもやの梅の中　六

立まりはてハ度数掃きり　坡
一年乃有伯冷込むも墓　六
深さの旅まの明さる彩　筆

三吟　木導

蛙鳴く天の川の霧のさむさかな　朱拙
青の豆腐の冷る　姐板
毎年麻呂の手鞠踏やりて　許六
色歩の徒と勝中よまく　李孝
蓋切て竹とかすまぬ勝よ　徳
奪塵の手ぬぐひ也　六

ウ
ひはちと曹洞宗は剃八海て　李孝
やりれて又業研もする　徳
天竺ものて下女化粧よりの紙　六
法おすゝ[illegible]をむく　李孝
茶くとよれ業はて業漬食　徳
産業へ舞て上る　加る　地　六
敵の手琥珀乃陳数のたゝ　李孝
数も新ぬ浜の有州　徳
所ゝ陳そるれいまゝまて　六

漁村乃華ハ深沢槽　李
薊蓋の如く流寺ハ也ものう　油
ハ生も芸て夜ハ沢潤　六
名
筒菜首平ハ　李
文井ゆとうに有堂乃茂　油
ハし女の子ハを嗜ハ孫魚て　六
前ハ敏ハ風うひ刻乃平　李
此茄子戸板の上ハ亀祭　油
まぐ賢麦平状の神祭　六

即茄子甲を脱て身を見る　李
矢口のまて平う深ハ丸川　油
奈粒ハ但ハ落る毎の中　六
蹄ハ乃孤ハ也ハ茅卵　李
精をハ無ハ此ハする旅の岩　油
解毒の穂を孫ハ此ハ原　六
珊瑚珠のまうつて赤ハ孫　李
木どもでたくめ夷大黒　油
四月芸ハ食ハ鍋ハ移りて　六

俤和泉乃蒔ゆる　春
をゝ釜はれしく茶を汲出　六
もゝ〳〵の降つく年　油

三峯　仮邸

炊う夢を吹きうされて冬の月
河原柳の一まんなかもる　仟六
お撫子の命をまもを咲ときく　本導
あまりのしれいよ上る俤の亟　村
かしこさに伯父の法まで丸めけり　六
解するやうなあの人ツカヒ　春

ウ いそうしゝ人をるも恵の一思葉　村
臨年　月ゆ星と用はれ有者　六
尼ゆる者を偽年浦ひ変　た
星を氣味くゝ考ゆ者　郎
美海の久世を知ら野の声　六
又十るをてそ考ゆ知ね魚　た
古宮民三ゝ仏ゆゆ兼の内　ゝ
まゝい西て年　月の陰さる　六
竹籠の果もちつく比花盆　た

白川石ゆ人をの考けさ　村
むさゆ考れけ後の御解　六
お考　河　乃ゆのそハつき　た
各　寺餅日の寺ハ考ゆて　ゝ
伊勢路の去れ紛のれあき　六
陸地年きの横根とやり　た
修ですゆる　城下　村
めつきゆと指ゝ茶仕出原て　ゝ
むすゆ坡とあつゝえやる　た

さしはや大はまの辰人云　之
又ほゝ抽て天きる月淵　六
夕涼ミ多坂三ヶ　乃
掃除の弦れ十柔の長さ　村
仏成の土蕎麦うゑき陽芽原　六
小僧ゝ母子ゝつと久の立　乃
合徒平蕎麦大根を打曲て　邸
師走ま去きゝ夕那の業取り　六
冰地長をたゝて焼ゝ花の内　乃

去年乃蕎の麦ハ之
ホ町れ垢(コリ)塵の未ゝ七月　乃
つけ木の報ゝ長風遥也　六

三吟

旅宿を定めぬき岩ほ分け牡丹
細ふ流れ幸ふかの くれ　　茅窓
西に月乃宮居飛し小夜交て　　程己
秋もやうく陽至有の月　　許六
道の七合成るくて遠ひろ　　之
稲むしろの風は人夏百姓　　洵

毛紙

ウ
ひろくと桜夜有まいられて
武士為の手まれたる休まれ
あるもあきの原中雀乃巣のまし　　丸
よい寺みるる茅原乃山　　京
月ちよれつよ八百屋の松木　　乙
夕こ年々中ま如房之人　　六
まこの取方はるる庄屋て　　之
酒しくあこと世もすむぶ　　丸
むの屋 祐前 乃 旅 扶　　六

一ゝ陸ゝ須うしろより　已
ふしけるゝみ六尺ゝを巡　巳
戸板平月の階をうまく　亥
名
頃ゝゝ吹上尺屋して　已
わはうゝ風ゝ公ゝの勝口　六
ゝやうゝゝゝゝゝゝのれ　亥
只月代ハ玉木の間畧　丸
傾城乃比女ゝあらもあれせ　六
隙ゝゝ暮ゝむすゝ　已

ゝみゝ言下陸乃月のあるゝ　巳
松葉　ゝゝ里ゝ浦の山　亥
岸入乃ゝ為ゝ宮ゝの物ゝて　已
即非のゝで禅ゝかゝゝ　六
果ゝゝやゝれ果ゝ風岸白集　亥
美賀ゝれゝてゝゝゝゝ危　九
一ウ　一四年ゝ下ゝ　宴　俵　六
暁ゝて通ゝ屋ゝ陸のゝ　已
かゝゝゝ立ゝの上ゝ月のゝて　巳

寺侍所乃判をする　三
よいもしたや　嵯峨
能の中よりうたひすの声　六

二唫　詩六

[illegible]乃腹義清を毛見ル
日向ハ照てる就乃腹を　李白
奉公ハ生涯をおれきハ立て　同
中でうるる[illegible]の[illegible]ら　六
月のかたうゝ何の地道ー　同
腹のうくれ面腹ゆれ　中

ウ
上下で這りむしろの縄まつ　由
死しらしの布洗　六
ちやつと洗の解る事無て　由
験気を抜尾張商い　六
恨含む女房の気を化粧て　巾
烏帽子て称互の出入する　六
まるまるの茶山乃喜あ　由
気をつけて入れ小乃十四在　六
地方のまゝ寝不も宮まゝ　巾

華羽織天て江戸の気宝
まるくとたれの市の口つさう　由
婿のまゝ居て今ぬくろ公口　六
名
白い地出れ拍掛くまの言　月
牛のはくして よ乃を坂　由
上体乃変まれ茶瓶　六
ひまつと鉢され おら 塗 彫　由
ほうくと三度の布よ洗気て　六
見方なくう 妾 奉 公　由

秋季の長雨あひ過ぎたれば　六
はや秋ぶりて世の哀まる　由
嵐吹く村口の下の秋い入　公
棚〳〵物のうるさき夜寒　中
あるじの中よりたゝる雲の月　六
ねの後の後の後の後の後　由
ウ　芭蕉の二番手うる和歌集　月
四今そこの秋くみはとハ風　公
面白の淵の代は夏の夏　中

まういて通る割乃る方　六
竈のもものうみはて美の出れ　由
ふ孔見うけてくゆ変の孔さ　六

七師三田忌　報恩

許六

月雪さま〳〵に消し残るかな　李由
小まもの蛍はれ雨もこそ　木導
蓑きるかのわらしの声なれて　朱雀
お役同志の帰用きや　汶邨
憎のふられて独る寝忘　馬佛
きふ取丁（カンヂ）蚩を人は押うく

ウ
哀くしき烟とそる揚や町　来蛮
松めつゝうゝ　胡布
数のまるおきはき牛房は小さ紀　毛孤
そ自奥あゝ謂之の家宅　程巳
人宕のなかやそ城の塚　徐寅
郭命賞年前を先へやる　六
青屋を取てまくる服ゝ　由
板を使ふて　曾
秋の月は村中こぞる　猶

ゝは出てあるる蕎麦の日
自笑で花入れる人をうらやま
一歩もゝ出て来ぬ雪ちる
雪降てよる佛の御供灌
春年蕎麦の細長き本の関
俳板のひらゝ濡るゝ門前
味噌焼門を抜きぬるゝ
かゝ向の輝よ猪ゝ鹿古道
るゝ殺れて春近ぬ吟ふ

村　佛　寒　布　孤　已　子　六　由

ひたやま猪の食ひ尽て切株
早蕨あゝむ蕨私のはゝ
足い茶女の仕ゝ所の日
旦宮の所の山のそゝ麦
孤ちよぶんぐと通る中駄物
麦ゝ材木でかゝら蹴鞠搗
ゝ人孟大義丁の九九の蓋
日そ赤ゝ出て雪のひゝつく
はゝ彼の孤とはまゝ上ケ

孟　独　村　佛　寒　布　丸　已　子

門の外より拝む大仏　六
おろくしと車の音此花見し　由
も衣更着の境界　葉

辞世

月ハ横手梟ハ以盛也雪佛　馬佛

悼馬佛

茲に丙子正月十二日六成堂の馬佛例の前
血をもよふして発する事まりね六年此多病に
毎に吟席を欠ぬしも仲秋又病床に臥て談
士ら三夜の遊ひをも催すする発して一軸を遺れたる
跡を似て自ら病る佛し秋者すまりハあれし六師
三回忌の追善興行の席まで延むそくさらそ
花見る人いくらもやましといひけむ句も今ふせん
むしとはまりね茶くすしときものくふの気色
も干鈍し花の良をあしそれる眼を利は有手
うもしれなさつらに鳥の賑き肥す嘆てうるし
風雅の斤腕をれとされ本下月おの遊ひに
多く一人を欠すす千悔万悔の此度哉

〻〻靈のまそ〻き名殘を追悼して
斷金のちぎりを謝すのみ　存由

千鉦もさすれ元の離れ添
河田てしたしなくなるなり　張正

乃中の味噌よこまりね旅ひて　許六

月猶の頃月のかゲよれ　朱紬

自の名まぬけて出る一をとを　本等

少し榜のまま杖の和尚　程巳

卿を小子見送り出る町　汶村

西大名乃二りらけく　徐実

皇まゐて嗅て四れる紙の箱　毛孤

魚の鳴て小ひ〻ひ〻の蝿　茶雲

敬京の記之はまれて出の雪　執筆

奔月記行の序　師友之餞別

許六離別詞

去年の秋うらなる所にあるこゝろ一日
ゝ神宮ゆるされむもそれみ乃をみて
りくしまの月能のしるべとして海路を
発し畫にぬ風雅をおもふ事こゝろみよとて
あるよ夏ゝ何のあやぬや風雅のたぬ〳〵以て
風雅をなすあるおもふや雲のあるとゝいへども
まことあるの二ゝ月にして見れるの一ゝ年ま

こゝろ君子ハ人の能を取て云れて品ゆゑは
ゆゑ師〳〵風雅ハ畫ハ一なるゆゑ風雅や畫ハ一なるゆゑ
ゆゑ雅を彫る畫ハ精神微ゆ入爭ハぬを
ぬるゆゑ真実をゆゑ風雅の人ゆゑ
ゆゑ風雅を真炉先家のこゝ元ゆゑ
ゆて用るゆゑ雅ハ和のこゝ
のこゝろゆゑ云ちゝ雅ハ
ぬまこゝゆゑ雅ハ

のこりすくなきものみもこまりうれへ歌こゝ寶
おりてさすもはなしひとりねとのこまひ遊
ものやまれさこのこゝろ力ゆゝしてさ四記
一条殿ゆゝしなりまるまるれれ
古人の作ともし学人のおもひ
をもこのよりて南山大師の一字法
もゆゝしりぬ紙文へれみ四ゝこゝて
燈とうまりて世つゆ年遠りて
日ゆゝしのこ

元禄六孟春案　北窓坊色葉述

三羅文庫

霞屋

おとゝしゝ月六日の比旅ゝしゝ
はゝりゝゝゝおとゝき例の作ゝ案
を使ゝして仏の弟ハ家も者法
を移ゝて文ゝよゝ文并ゝゝ
長城の作ゝよゝゝゝゝ面也ゝ

つくて子孫うつる事人よりはたす
ゆゆしうれしかるべきやうみしてを
能天満宮の社もせまりかれ給
別の情あさうしてをなるを
れと和んちろまをしめかうして河出
をそしてもまはせるこけを考られ
ゆゆ事板橋よりの分銘別あり

長河

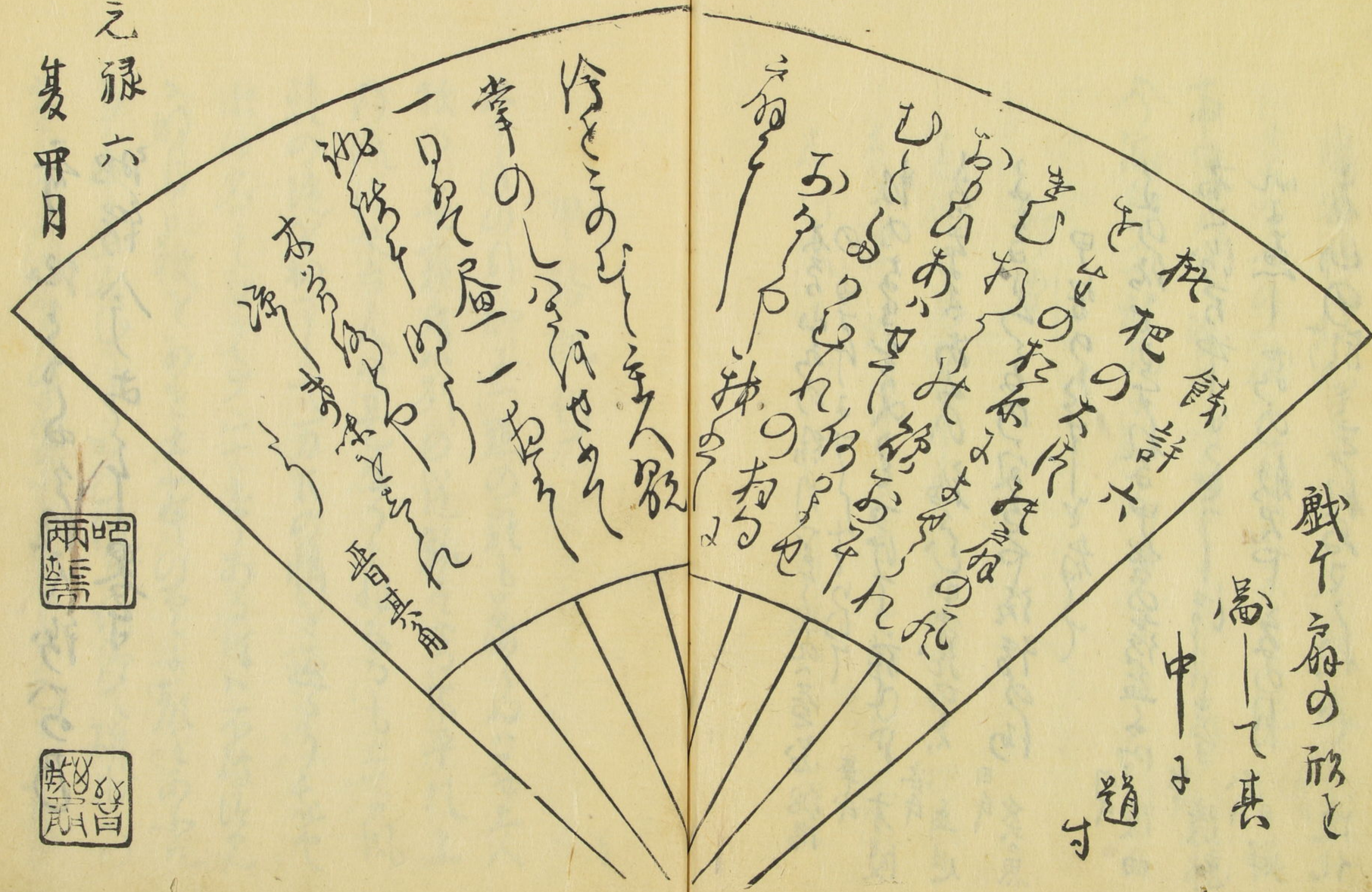
本宮河を流て旧里みかの人ハ表川民新ハ
と云ふ十一月紅葉の情ある人とハなみ花を
多き常緑の色をいふ彼岸ゆゆ高をいふ
てなのれっんをせあて物花賞とする歌よ
ろこ人里と住居を月やけのあるハ毛河を眺
よんまと云ふけのなる語をもも世の月
堂の里ゆきの風のうすて風ひらかく
しなあるなは人のもるあるあるあ人ゆ

椎のもも落んとも似よ本草の議をきれ
よし人の説ををかへ本草の槐 円
あるひ一句よ改定すべきよしアてんかれと
今滅はの形見よ竹ろうすもし人依る

餞別

笠縫や道月見よし風あやめ草よ 松風
あまりよ悲しむさしなる花田か 桃隣
本山流し〳〵り流しさよ 百里

本草山家の議りをそへ人蔵器紙僧
の母けよすみ生りて 草氏
性のあきをよとつけて旅よりか 才枝
あまあみあちい稀む出る記の志 安氏 孟退
まえさよろるの冥ろや淡路の河 田氏 奚魚
甲斐のたずねを聞て
其の旅をよすれなる甲斐の空路盃を酌 門氏 陳曲
不二湖方中まちをうし渡しきす 林氏 陳鄰
似よ道一家の姿見んや夜の月 松氏 日鮮
夜山の形(なり)ここれねされかし 前氏 連化



元禄六
葵卯月

奇紀とも名れん物語乃
あらす今書

甲路記行

又十日のり船より一路の船もなきゆへ西上人
独の上西蓮氏八列の道旅を思不平れ上
乃流涙せ台人ハ是なるも拙なるも其の風
雅の境をおすして万古の情を述るり歌も
此の客となるる二十年あるハ不仕合
う的月を歌とあ事を土産のもとよ乃をあ
るゆゑ又むさ一りじはゆ行て碓氷乃
雪とまるハ本名の紫を分入る巳三ヶなる

[illegible]西南小[illegible]奉[illegible]す[illegible]本今て十一段
世[illegible]秋[illegible]郡本[illegible]
[illegible]
八甲[illegible]の猿[illegible]を[illegible]て上の[illegible]
[illegible]
下[illegible]の紀[illegible]を拔きて久[illegible]の和歌[illegible]
戰場の由[illegible]
[illegible]の[illegible]
枕の[illegible]

[illegible]
一[illegible]
[illegible]人の[illegible]
六日[illegible]退

[illegible]の[illegible]の馬[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

旅すく谷のなくさめは半あつめて茶屋へ
おくりとゞけてよりれんこの師のうこんれ一盃
をすゝめれを喜ぶ

旅行人の旅の賦　毋小序

旅とは旅のむれ行人乃説あり家
我の人おゝ八皆孤の旅也家白川
乃田舎ゝと学ぶ人奥羽の人出ゝ家飯
社交ゝは名所ゝを尋しあつゝ山の人

すみよハ吹浦をゝ人伝ゝは横手天
の川ゝ秋社社殿を尋ゝられゝ路乃
二ゝを渡て七百三十余程をゝ寸尋ゝ
為整ゝ力竜を感一弾の飯をゝて
ゝ流を直ゝ見ゝ日ゝ人ゝ家屋を設ゝ西
の雑侠ゝ為ゝ対ゝ帝ゝ旅中ゝ孫をゝく
せて傍ゝて伺ゝ来ゝ有ゝ可ゝ
殺ゝたゝり伝ゝ人をあつめ相賦ゝ限ゝ
ゝ寸宍異奥の酒ゝ茶ゝの類ゝハ孤寸

旅店の二階上段より書院毎級美はすし
先のるき先徒よやしてて門口の入口相
傾て居しうち庭より小形のさかるハ後への形
ひもいろし出安乃堅溜ハ表れを立て
根ハ根裏ハ落て隅くまて是を立て
天井毎まハ面をよきハつき欄干ハ
うつの紙ハ市中の心ちして来る旅人
衣裳市義裏よせうゆれやしくは杖を傾
市ひまき宅情入られハるさ此者は寄成

なるを出さらハもつと云ふて矢さるを旅人も亭
主もよく痛て夜の明てもうくはしらも
よ久し

大石乃寝間も移る定さ
乃ゝれの上ハいゝ私訳の胸ハ今をとを
加義過しをすき馬さしとはゝ会一僕
の後ようさ所を移ゝ弱の雪毎ゝ
此男を記し拙地を拙を
多稿のやうはし入の一番は入る所ハ

何の為ぞやはくの柿紫手母のたらく
といふなるべし
世俗要きの為手あきらか風流の為めに
以てるも此情に加へて
世人の貴人に銘酒のあきなひもあり擂汁
練の銘を冷にいふは未来焔王の前をおそる
きめなれあると又奥をこえて天も此事に趣と
すむるは手段の茶屋錦の後にしと
見しきるは凡俗の甚也玉子れ者ぞねきあそ

木気の数ら紙は何よんさみ歌の肴根は
筍とかけまで長翁の田楽を何志乃
詠むまうきそ
茶息手まその蜜栂や宇津の山
舟川の上一る勢龍の精気は しかれへ
しみ月の木あまから備の多数よ書入れ
おのゝ州の戸を流られし肩まけの熊野に
御してまりしれ息なはくしの鳴る田合
の賊也人の河漂を何みかといふしと祝て

大きなる酒瓶を天秤の中乃風ハる人を
をそれよりまとよりふるまる人ハ股ふけ入て者を
腐ふけてまらあるうる老ハ腐れ毒なる
て舟ゆる立ハ身ハ水ふ陸をうるふ風ハ
場の情也百生加る竜舟ハ鶴童子月月
とおくて一盃の酒ハ俗世の氣をやー
なふ一生と深き新と丹面して中分の
号ハ鶴ふ左見の日出元のあ
ま板の木の下ふ脚て蛙の歌ふ聞る孤

小欲少食を有なるハ長寿ふ生て出す
百月の食し俗ハ小俗ハ生ふ
吸ふ人ふの裏ふ入ふ人ふ耳の穴子
細ふ食ハ人ふ出ふ一ふ勢の久ふ
も言て世ふある人ふ人ふ月日を
出ふの手ふ穴ふ風ハ世を
ふる人ふ人ふ俗ふ

出女も出ふ人ふ都ふ人の言
流流源泉のふ人ふあれふ人ふ

おなじ稚児なれハ君をかゝ面白しとな
二夜ハとゝまる月毎に礼氣霊の夕暮
よ情ふかきあるゝて七珍臭き衣
てめれとも物を焼大よあぐるハ三方
蓋神とゝ物をたゝつまりて三つ〻れ
を体むれたれのれ場より退りさ
れて却て〻ぬるゝ股をすくめも
方のよ杖を持て歩むへしとも尸て
人間病死のゝ来ぬ時も不もまさす

醫療のたすけハとゝ懐中の振素ハやしく
急病を防く巡礼の脚ハ所月
倒れ外大片月ある所黄を退それた
俗の懸そて門下を入ろれとろへるれ孤
よ黄泉の下を訪くゝて何ゝのあしあん
孤りをたゝすたし〻ゝ生年まとめてゝの
数い衣類の掛紙を小札をたるされ仏
ゝのいるある人とゝふゝもたゝすゝ切也
器アの辻堂の笠を絶文をもて同行の

別を惜む隅田川の急仏を弱て七夕の花濃
き今年元祿の人旅懐の情をたゝして
凡粧の腸をさゝす能用八白川の舟を
よみて二ひらの〳〵編き不二詠るの二
句をれてすゝやたれ望を海る赤八貞室
老人也毒海氏の一すきをとゝ人凡雅を
おもひつゝ〳〵いひし義の夢年共
廣年ゝ〳〵まれ

于旨元祿九年丙子孟陽月日於

風狂堂 選之

五老井主人　木六羽官　許子六

武枝

孟耶觀主頭

月澤獄人　買弁僧李由

永寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛

秀尹